

五島彫りについて

- 1) 五島の珊瑚の歴史は、明治19年男女群島付近で小島の漁師山本弥四郎の魚網に赤珊瑚が掛かり島に持ち帰ったのが契機になり、翌20年より本格的な操業がはじまった。
- 2) 明治後期から大正初期にかけての最盛期に多くの珊瑚船が富江町にあつまりました。長崎県は宝石珊瑚を原木のまま輸出するだけでなく製品にして輸出や国内販売を考え、(大正3～5年の3年間、今の通産省にあたる省が長崎県五島市富江町に珊瑚彫刻を教えるために、大阪から一流の象牙職人を選び、その人を専任講師として3年間教えたことがありました。その技法が現在も言われる五島彫りの基本となっています。
- 3) 川瀬利三郎、田坂晩岳さんの師匠であり、今井秀星、谷脇利光さんもそこで修行されました。
- 4) 今井さんはその後独立して、今井珊瑚工房を立ち上げ、7人の弟子を育てました。山川明崩、赤堀秀河、北川勝教、西島光洋、笹方秀峰、北野芳人、飯塚雅己
- 5) 五島彫りの特徴としては、材料を贅沢に使い2～3段彫りと呼ばれる技法で、桃珊瑚が多く使われていました。宝石珊瑚の中でも薄いピンクのボケ(エンジェルスキン)は現在では全く取れないので幻の珊瑚と呼ばれています。
- 6) 今井氏の評価として板物(平面彫刻)では日本一の技術を持ち、土佐彫と五島彫りでは評価に差がある。2番手以降の方とはかなりの力量差があった。
- 7) 銘は当時より、原木の切り出し、荒磨、仕上げと総てする必要があり、多くの優秀なお弟子さんがいた為に最後の仕上げをしていたので銘は入っていない。
- 8) 田坂晩岳、柴田晩仙さんは主に置物を製作されていた。